

鳥瞰図

詩 第一号

十三人の子供が道路を疾走する。  
(道は袋小路のほうが適当である。)

第十二の子供も怖いと言う。  
第十三の子供も怖いと言う。

第一の子供が怖いと言う。

十三人の子供は怖い子供と怖がる子供だけが集まっている。  
(他の事情はない方がむしろよい。)

第二の子供も怖いと言う。

その中の一人が怖い子供でもよい。

第三の子供も怖いと言う。

その中の二人が怖い子供でもよい。

第四の子供も怖いと言う。

その中の二人が怖がる子供でもよい。

第五の子供も怖いと言う。

その中の一人が怖がる子供でもよい。

第六の子供も怖いと言う。

その中の一人が怖がる子供でもよい。

第七の子供も怖いと言う。

その中の一人が怖がる子供でもよい。

第八の子供も怖いと言う。

(道は通り抜けの小路でも適当である。)

第九の子供も怖いと言う。

十三人の子供が道路を疾走しなくてもよい。

第十の子供も怖いと言う。

(蘭明訳)

第十一の子供も怖いと言う。

(蘭明訳)

李箱<sup>イサハ</sup>(一九一〇〜一九三七)が日本占領下の京城(現在のソウル)で朝鮮語で書いた一篇である。声に出して読んでみると、単純無味な繰り返し返しの向こうから、一心に道を駆け抜ける子供たちの悲鳴が聞こえてくる。十三人の子供に名前はない。番号で表示される子供たちには顔がない。怖いと叫びながら走っている子供たちは一瞬にして「怖がる子供」から「怖い子供」に翻るかもしれない。暴力に晒されている者は潜在的に暴力性をもたされる。小さな子供たちが袋小路の行き詰まりにぶちあたってどうなるのかと思つた瞬間、「袋小路」は「通り抜けの小路」に変わる——と思いきや、「道路を疾走しなくてもよい」とは、一体どういうことだろうか。行き止まりの道を走る絶体絶命の子供たちの前に立ちはだ

かる壁が消えたとき、向こう側へ通り抜けた子供たちは、いたのだろうか。「疾走しなくてもよい」といわれた瞬間、圧倒的な沈黙が聞こえてくる。気がついたとき、彼らは消えている。誰にも知られずに、消されてしまったのではないかという思いがよぎる。

李箱は朝鮮語と日本語で詩を書き、二十六歳で渡日し、半年も経たないうちに拘束され、体調悪化で釈放されて間もなく、二十七歳で東京で死んだ。これは朝鮮語で書かれた作品だが、題名は「鳥瞰図」ならぬ「鳥瞰図」(オガンド)である。鳥の視点から見える光景から、聞こえてくるのは抑圧された植民地の人々の声にならない声である気がしてならない。

今も、絶体絶命の声はあちこちから聞こえているはずだ。ウクライナの情景が目には焼きついて離れないが、誰の目にも暴挙としか映らない戦争に限らず、世界のあちこちで、言葉にならない声をあげようとしている人がいる。日本でも、すぐ近くで無数の声が響いている、いや、響いているにちがいないと言うべきだろう。情報がとつともない勢いで氾濫し、真摯な言葉とフェイクな言葉が一緒くたになって日常を覆い尽くしている今、目の前のものを見ること、すぐ傍の叫び声を聞くことがますます困難になっている。

一九六九年、フランスの歌手ブリジット・フォンテーヌは、*fait froid dans le monde* (世界は寒い)と、しゃがれた声で繰り返して歌った。一九六八年「五月危機」後のパリ。歌の題は、*Comme a la radio* (ラジオのように)。しだいにみんな世界の寒さに気づきはじめている。そして、あまりにも寒いので、「火事」が起ころいはじめ。それでもラジオは鳴りつづけ、言葉が溢れかえっている。ただ音を出すための言葉が、ただの言葉が、沈黙を埋めるために。SNSを通して際限なく散らばってゆく言葉の狭間に織り込まれる切実な声を聞き分けることができたとして、その前に立ち尽くすしかない無力感は何もない。そして、その背後には、言葉にならない声が轟音のように響いている。出口なしの沈黙の叫びをどうやって受けとめることができるのか。この世界が寒くありつけないことを祈る思いで、二〇二二年の春を迎える。